白書対策　働く女性の実情（2017 年版）No.1

みんなの社労士合格塾

平成 28 年 9 月 20 日厚生労働省発表の「働く女性の実情」から（概況）

(1) 年齢階級別労働力率

就業者数と完全失業者数とを合わせた労働力人口が 15 歳以上の人口に占める割合

～M字型の底（「30～34 歳」）の労働力率が 20.6 ポイント上昇

女性の労働力率を年齢階級別にみると、いわゆるM字型カーブとなっているが、その形状は、昭和 60 年からの 30 年間で大きく変化している。

昭和 60 年は、「20～24 歳」（71.9%）と「45～49 歳」（68.1%）を左右のピークとし、「30～34 歳」（50.6%）を底とするM字型カーブであった。

平成 27 年は、「25～29 歳」（80.3%）と「45～49 歳」（77.5%）を左右のピークとし、「30～34 歳」（71.2%）が底となっており、M字型カーブの底の値が 20.6 ポイント上昇し、窪みが大幅に浅くなるとともに、全体的に大きく上方にシフトしている。

M字型カーブの底となる年代については、昭和 60 年から平成 19 年までは、「30～34 歳」であったが、晩婚化や第一子の平均出産年齢の上昇等により、平成 20 年から平成 26 年は「35～39 歳」となった。なお、平成 27 年は「30～34 歳」となっている。

年齢階級別の労働力率を昭和 60 年と比べると、多くの年齢階級で上昇しているが、上昇幅が最も大きいのは「25～29 歳」（26.2 ポイント上昇）であり、次いで「30～34 歳」（20.6 ポイント上昇）、「55～59 歳」（18.0 ポイント上昇）、「50～54 歳」（15.3 ポイント上昇）の順となっており、M字型カーブの右側でも上昇幅は大きくなっている。

最も上昇幅が大きい「25～29 歳」については、昭和 60 年では「20～24 歳」に比べ 17.8 ポイント低かったが、その後上昇し続け、平成 14 年に「20～24 歳」の値を上回り、翌平成 15 年以降は最も高い年齢階級となっている。